

## 1. 児玉暁洋『<sup>しょうしんげこうる</sup>正信偈響流』 「あとがき」

正覚は寂かな<sup>しょうがく しず</sup>仏陀の証<sup>さとり</sup>であります、その沈黙の中には、深い声があり、原初<sup>ことば</sup>の言があり、無音の大音があります。そしてその無音の大音こそが南無阿弥陀仏という“ことば”であります。われわれが何気なく称える<sup>とな</sup>一声<sup>ひとこえ</sup>の南無阿弥陀仏、そこに正覚の大音が響き流れているのであります。

(『正信偈響流』東本願寺出版部より1992年刊。1983年7月から1984年1月まで26回にわたるラジオ放送「東本願寺の時間」の原稿をまとめたもの。『児玉暁洋選集』第8巻所収。法藏館より2019年刊)

## 2. 今日の問題状況

釈尊が明らかにされた仏教と、宗祖親鸞聖人がうなづかれた仏教とは、どのようにつながるのか。

### 3.1 曾我量深<sup>おうげん</sup>『往還の対面』(1952年2-3月講話)

[以下、引用文中の、角括弧[ ]内の文、ルビ、および下線は、すべて引用者]

今日、阿弥陀の本願のお法<sup>みのり</sup>教<sup>きよざわまんし</sup>えがはなはだ振るわぬということについていろいろと考えるのであるが、実は明治時代に清沢満之先生[1863-1903]が、短いその一生を信仰の確立に捧げられて、他力救済の確証を握られたということは特筆すべきことである。

私は子どもの時分から、子ども心にも真宗の教えについて深い疑いをもっていた。それまではただ愚衆<sup>ぐしゅう</sup>に慰安<sup>いあん</sup>を与える卑近<sup>ひきん</sup>な教えであるとのみ思われてきたのである。その後、宗門の学校にも入ったがどうしても他力救済の教えというものが了解されなかった。清沢先生の教えをいただいてはじめてたいへん尊い法<sup>みのり</sup>であるということがわかってきた。

その方面は一応わかってきたが、今日でも問題になっている釈尊の根本<sup>あごんきょう</sup>仏教、阿含経というようなものといいたいどんな関係をもつかということになると、どうしてもわからなかった。昔の人もやはりこの問題をもっていたのであろうが明らかにしておらぬ。結局、大乘仏教、とくにわれわれの他力救済の教えというものの根本<sup>お</sup>を推していくと、釈尊の悟りにもとづくのであろう。[中略]

それでこの点からの釈尊の悟りを親鸞はどのように了解していたかをいろいろと考えてみると、[中略] これをだんだんと推<sup>お</sup>していくと南無阿弥陀仏が釈尊の悟りということになる。[中略]

積尊の悟りは、南無阿弥陀仏である。これ『大無量寿経』の精神であり、七高僧の伝統しちこうそうである。これが三部経のなかで『大無量寿経』をもって真実教として出世の大事をあらわす経典と親鸞が明らかにされたゆえんである。このことをこのごろ表明できるようになったのである。[中略]

信心しんしんの象徴は根本にさかのぼると積尊の悟りの象徴に帰着するのでなかろうか、簡単に申せば積尊の悟りは南無阿弥陀仏である。われらの信心の体、南無阿弥陀仏である。これを推していくと、積尊の悟りの体が南無阿弥陀仏というのが親鸞の了解の根本の問題であろう。これはいままで言わなかったことである。本願成就の文は、積尊の体験、すなわち体験は悟り、具体的な悟りをあらわすものと解釈すべきであろう。[中略]

われわれは七百回忌[1961年]を九年の先に迎えるのであるが[1952年、曾我先生77歳]、その第一の仕事は教主積尊に帰るとというのが一番大切なことであろう。小さな宗派根性で仏教を私わたくししてはならぬ。今日では積尊を忘れて自分の宗派の祖師ばかりを崇めている。道元だの、法然だの、また親鸞教だの、日蓮教だのというのが、根本の積尊に帰るのが一番の要でなかろうか。それでなくては、仏教は世界的になることができない。世界的に眼を開くには積尊に統一すべきであろう。

(1952年8月 月愛苑刊。『本願に救われていく』1964年 教育新潮社刊所収 151-156頁)

### 3.2 曾我量深『如来について』(1952年6月清沢先生五十回忌記念講演会)

大体、積尊あのおくたが阿耨多羅三藐三菩提らさんみやくさんぼだい [無上正覚むじょうしょうがく] を成就したという、これを仏しやうぶつの成仏というが、この積尊しやうがくの正覚とはどんなものであろうか。私は親鸞の教えによって『大無量寿経』の本願成就文ほんがんにじやうじゆもんをいただくと、積尊の悟りはどんな悟りか、積尊の悟りはそこに坐るといような固定した悟りではない。積尊の悟りは固定しておらぬ。南無阿弥陀仏が積尊の悟りである。(選集 p.256)・・・[中略]・・・

本願成就して南無阿弥陀仏、本願成就のない時は南無のない阿弥陀仏を求めていた。...しかし本願成就していまさらに南無阿弥陀仏になられた。永遠に南無阿弥陀仏。これが阿弥陀仏の本願成就である。これが積尊の悟りである。南無阿弥陀仏は積尊の悟りの象徴である。積尊をして積尊たらしめる阿弥陀の象徴が、南無阿弥陀仏である。(選集 pp. 257-258)・・・[中略]・・・

南無阿弥陀仏は積尊しやうちやうの悟りの象徴である。南無阿弥陀仏をもって阿耨多羅三藐三菩提を

成就した。南無のない悟りは無上涅槃ではない。このことを親鸞は法然あに遇って始めて了解されたのであろう。

私は清沢先生のたどられた道を思うとき、仏教は釈尊に帰らねばならぬと思う。釈尊を超えねば釈尊に帰られぬ。親鸞の御遠忌[1961年七百回忌]を迎えるにあたって、親鸞のところに立ち止まってはだめである。南無阿弥陀仏の根元に帰って釈尊を超えて釈尊に帰らねばならぬ。(選集 p.258) [またお祭り騒ぎの愚を繰り返してはならぬ。今日清沢先生の五十回忌に列して切に念ずることである。(山田亮賢編『絶対他力道』1988年刊によって補う)]

(1952年7月『真人』第45号、『分水嶺の本願』1954年真人社刊、『曾我量深選集』第十一巻 p.256, 258)

### 3.3 曾我量深『分水嶺の本願』(1952年7月根室別院、9月三条東別院)

(1) 釈尊の悟りは南無阿弥陀仏、南無阿弥陀むじょうねはんは無上しょうちよう涅槃しょうじようじゆの象徴である。... 正定聚とは現在に自分の分限を知ることである。(「分水嶺の本願」『曾我量深選集』第十一巻 p.271)

南無阿弥陀仏と仏を念ずると、我われは仏の世界と人間の世界の分水嶺ぶんすいれいに立たしめられる。... 阿弥陀しゃばの浄土と我らの釈尊しゃばの娑婆との交差する頂点に十一願ひっしめつど必至滅度の願がある。その頂点げんしょうふたいに身を置くのを現生不退という。このことを『大経』の下巻のはじめに釈尊が教えていると親鸞がはじめて明らかにした。そのことを今日にしてはじめて申し上げることができるようになった。(同 pp.291-292)

(2) 大体、今日の学者が根本聖典とあがめる阿含を見ても、夢のなかで醒めたという程度で、... それで満足しておった人の編集したのが『阿含経』である。(同 p.314)

阿含の根こそ根本仏教である。あの根になるものは何か。根がなくて阿含が伝わるはずはない。この根は如来の誓願である。... なぜあんな経典が伝わったか、あんな散漫な個人的な解説が、真実証のない、証明のないあんなものがどうして伝わったか。(同 p.315)

『阿含経』などの涅槃は個人的の涅槃であろう。... そんなものだけをとってきて、これが根本の聖典などと言うが、これは地上のもの、地上のかびのようなもの、何と云ってもかびに過ぎぬ。もっと根底的な阿弥陀の本願を貫いて、本願を貫いたところに法爾自然の一如の世界に接することができる。そこまで徹底して根本仏教と言うべきであろう。(同 p.331)

## 4. “阿含経、がたどった道

(1) 阿含経(āgama): 釈尊入滅直後に仏弟子たちによって編集された釈尊の教説全体。

- (2) 大乘經典: 新たな如是我聞によぜがもんによって現われた菩薩道だいあみだきょうを説く經典。『大阿弥陀經』  
 (『無量壽經』の最古の訳)や『道行般若經』(『般若經』の最古の訳)などの大乘經典。  
 (3) 『般若經』は、無上正覚むじょうしょうがく (阿耨多羅三藐三菩提あのかたらさんみやくさんぼだい) を求めて歩む菩薩の仏道を大乘と呼んだ。それに対して、無上正覚を求めることから退転した仏道を声聞乗しょうもんじょうや独覚乗どっかくじょうと呼んだ。大乘に対して、小乗という。  
 (4) 一代教いちだいきょう: 中国で翻訳された經典をすべて釈迦一代の教説とみなし、説かれた順序にしたがって整理し、最も重要な教説を決定しようとした。その中で阿含經は最初に説かれた教説であり声聞乗すなわち小乗の教説と見なされた。  
 (5) 近代仏教学研究: ヨーロッパ経由で、パーリ語による阿含研究が伝えられる。

## 5. 清沢満之の阿含經読誦

清沢満之 1863年8月10日(文久3年6月26日) — 1903(明36)年6月6日(39歳)

1893年7月 関西仏教青年夏期講習会ふたみがうら(二見浦) 清沢30歳、姉崎20歳(秋より東大入学) (1903年  
 に姉崎正治あねさきまさはるが暁鳥敏あけがらすはやに宛てた手紙に、二見浦で清沢先生に会い、阿含あごん 小乗しょうじょうと人は貶めてい  
 るけれど、見る人の心次第、おもしろいと教えられた旨を記している)

1898年 清沢の日記「病床雑誌」(正月より阿含經の増一阿含ぞういつあごんから読み始め、二月末には四阿しあごん  
 含べつやく、別訳などを読み終えている) (『清沢満之全集』第8巻171頁)

1898年 清沢の日記「徒然雑誌」7月7日「(本日午前『太陽』新号着。中に姉崎氏大乘經とぜん  
 の偽作について論あり) 大乘經非仏教たるも可なり。大千の經卷はもとより拭穢しよくえの  
 故紙こしなり。しかも故紙なりといえども、そのなかについて争うものにおいて、ま  
 た言句ごうごのはなはだ当途の要件たるを思うべし」[拭穢ふじょうの故紙ぬぐ:「不浄を拭う故紙」(臨濟りんざい  
 録ろく)にもとづくか]

(『清沢満之全集』第8巻325頁)

## 6. 姉崎正治『根本仏教』(1910年 明治43年 37歳)

姉崎正治 1873(明6)年7月25日 — 1949(昭24)年7月23日(76歳)

1893(明26) 東大入学 1900(明33)(27歳)-1903(明36)(30歳) 留学

1904(明37)(31歳) 東大教授(宗教学) 1904(明37)(31歳) 『現身仏と法身仏』

1908(明41)(35歳) *Concordance*. (漢訳阿含經とパーリ語經典の対照表)

1910(明43)(37歳) 『意志と現識としての世界』(ショーペンハウアー『意志と表象とし  
 ての世界』の翻訳)

1910(明43)(37歳) 『根本仏教』(阿含經の教説内容の概説)

7. 真宗仏教の開顕—四諦の教説と三心釈—<sup>さんじんしゃく</sup>

(「正信偈」源空章)

げんらいしやうじりんでんげ  
還来生死輪転家しやうじりんでん かえ  
生死輪転の家に還来することは、けっちぎじやういしよし  
決以疑情為所止ぎじやう しよし  
決するに疑情をもって所止とす。そくにゆうじゃくじやうむいらく  
速入寂靜無為楽すみ じゃくじやうむい みやこ い  
速やかに寂靜無為の楽に入することは、ひっちしんじんいのうにゆう  
必以信心為能入のうにゆう  
必ず信心をもって能入とす、といえり。

果てもなく迷いの世界をめぐること

その原因はただ一つ疑う情<sup>こころ</sup>によってなり速やかに涅槃の証<sup>すみ さとり</sup>に入ることの

その原因はただ一つ真実信心によってなり

(「正信偈響流」『児玉暁洋選集』第8巻 99-100頁)

## 8. 『選択集』三心章深心釈

じんしん いわ じんしん しん まさ  
深心とは謂く深信の心なり。当に知るべし、しやうじ うたがひ もつ しよし な  
生死の家には疑を以て所止と為し、 [還来生死輪転家 決以疑情為所止]ねほん みやこ のうにゆう  
涅槃の城には信を以て能入と為す。 [速入寂靜無為楽 必以信心為能入]かるがゆえ こんりゆう くほん おうじやう けつじやう  
故にいま、二種の信心を建立して九品の往生を決定する者なり。

(『選択集』三心章深心釈、『真宗聖教全書』1, p.967)

## 9.1 『正信偈』源空章二行四句の受けとめ(1) (児玉『正信偈響流』より)

さて、この『正信偈』の四つの句は、前半の二句が生死の因果を、後半の二句が涅槃の因果をあらわしています。そして前半の二句の真ん中に置かれている「決」[決するに・決定]、後半の二句の真ん中に置かれている「必」[必ず・必定]こそが、迷い(生死)の因果と証(涅槃)の因果を、真実の道理として、決定しているのであります。

そして、この「決」および「必」において生死と涅槃とは直結しているのです。生死の因が「大願業力の不思議をうたがうところ」(「尊号真像銘文」聖典529頁)すなわち「疑情」であると決定して知るその深信はただちに涅槃の因である信心であり、涅槃の因が「真実信心」であると決定して知る深信は、生死を生死として、迷いを迷いとして味ますことなく照らし出す「信心の智慧」であります。

このようにして、深信は、分水嶺のように生死と涅槃とを、穢土と浄土とを「ツマビラカ」に「ワカチキワム」る、まさにそのことにおいて、この生死を「仏の御いのち」(道元

『正法眼蔵』生死卷、水野校注・岩波文庫(四) 467頁)として現前せしめるのであります。その時、帰命無量寿如来として、南無一阿弥陀仏として、如来の本願力に生かされて生きる者となるのであります。

(「正信偈響流」『児玉暁洋選集』第8巻 101頁)

## 9.2 『正信偈』源空章二行四句の受けとめ(2) (児玉『正信偈響流』より)

釈尊は、正覚の内容を、最もすぐれた法を説く最勝法説さいしょうほうせつといわれる四諦したいの教説として表現されました。苦く聖諦しょうたい、苦集くじゅう聖諦しょうたい、苦滅くめつ聖諦しょうたい、苦滅道くめつどう聖諦しょうたい、つまり、苦・集・滅・道の四つからなるこの四諦の教説は、前半の苦と集が迷い＝生死の因果を、後半の滅と道とが証り＝涅槃の因果をあらわしています。

この釈尊の四諦の教説は、いまの『正信偈』の四句にぴったり重なるのであります。

還来生死輪転家(生死輪転の家に還来することは)は、苦諦に

決以疑情為所止(決するに疑情をもって所止とす)は、集諦に

速人寂静無為楽(速やかに寂静無為の樂に入ることは)は、滅諦に

必以信心為能入(必ず信心をもって能入とす)は、道諦に

ぴったりと相応しています。そして、迷いの因果をも証りの因果をも、苦をも樂をも貫いて「諦」= satya (真理)という一語が置かれています。この諦を示す『正信偈』の言葉は、先にももうしましたように「決」であり「必」であります。

かくして、われわれは言うことができます。

深信じんしんを獲うることは、凡夫ぼんぷの身みにありながらかたじけなくも、釈尊正覚しゃくそんしょうがくの一念いちねんを頂戴ちやうだいすることである、と。

それであるからこそ、宗祖親鸞聖人は、

まことの信心しよぶつの人をば、諸仏しよぶつとひとしと申すなり。また、補処ふしょの弥勒みろくとおなじと

も申すなり。(「御消息集(善性本)」聖典588頁)

と記されたのであります。

ここに、真宗仏教は余蘊ようんなく開顕かいけんされているのであります。

(「正信偈響流」『児玉暁洋選集』第8巻102頁)